

第1章

キャリア教育とは何か

第1節 キャリア教育の必要性和意義

1 キャリア教育が提唱された背景

キャリア教育の重要性が叫ばれるようになった背景には、20世紀後半におきた地球規模の情報技術革新に起因する社会経済・産業的環境の国際化、グローバル化がある。その影響は日本の産業・職業界に構造的変革をもたらしたことにとどまらず、我々の日常生活にも大きな影響を及ぼしたことは周知のことである。キャリア教育導入の背景を考える上では、このような社会環境の変化が、子どもたちの成育環境を変化させたと同時に子どもたちの将来にも多大な影響を与えたことを認識することが重要である。情報技術革新は、子どもたちの成長・発達にまで及び、さらに教育の目標、教育環境にも大きな影響を与え始めている。

こうしたことを踏まえて、子どもたちをめぐる課題やキャリア教育が提唱された経緯について考えてみたい。

(1) 子どもたちをめぐる課題

子どもたちが育つ社会環境の変化に加え、産業・経済の構造的変化、雇用の多様化・流動化等は、子どもたち自らの将来のとらえ方にも大きな変化をもたらしている。子どもたちは、自分の将来を考えるのに役立つ理想とする大人のモデルが見付けにくく、自らの将来に向けて希望あふれる夢を描くことも容易ではなくなっている。

また、環境の変化は、子どもたちの心身の発達にも影響を与え始めている。例えば、身体的には早熟傾向にあるが、精神的・社会的側面の発達はそれに伴っておらず遅れがちであるなど、全人的発達がバランス良く促進されにくくなっている。具体的には、人間関係をうまく築くことができない、自分で意思決定できない、自己肯定感をもてない、将来に希望をもつことができない、といった子どもの増加などがこれまでも指摘されてきたところである。

とどまることなく変化する社会の中で、子どもたちが希望をもって、自立的に自分の未来を切り拓いて生きていくためには、変化を恐れず、変化に対応していく力と態度を育てることが不可欠である。そのためには、日常の教育活動を通して、学ぶ面白さや学びへの挑戦の意味を子どもたちに体得させることが大切である。子どもたちが、未知の知識や体験に関心をもち、仲間と協力して学ぶことの楽しさを通して、未経験の体験に挑戦する勇気とその価値を体得することで、生涯にわたって学び続ける意欲を維持する基盤をつくることができる。また、多くの学校で実践されている自然体験や社会体験等の体験活動は、他者の存在の意義を認識し、社会への関心を高めたり社会との関係を学んだりする機会となり、将来の社会人としての基盤づくりともなる。さらに、子どもたちが将来自立した社会人となるための基盤をつくるためには、学校の努力だけではなく、子どもたちにかかわる家庭・地域が学校と連携して、同じ目標に向かう協力体制を築くことが不可欠である。

今、子どもたちが「生きる力」を身に付け、社会の激しい変化に流されることなく、それぞれが直面するであろう様々な課題に柔軟かつたくましく対応し、社会人として自立していくことができるようにする教育が強く求められている。

キャリア教育が必要となった背景と課題

情報化・グローバル化・少子高齢化・消費社会等

学校から社会への移行をめぐる課題

- ①社会環境の変化
 - ・新規卒者に対する求人状況の変化
 - ・求職希望者と求人希望との不適合の拡大
 - ・雇用システムの変化
- ②若者自身の資質等をめぐる課題
 - ・勤労観、職業観の未熟さと確立の遅れ
 - ・社会人、職業人としての基礎的資質・能力の発達遅れ
 - ・社会の一員としての経験不足と社会人としての意識の未発達傾向

子どもたちの生活・意識の変容

- ①子どもたちの成長・発達上の課題
 - ・身体的な早熟傾向に比して、精神的・社会的自立が遅れる傾向
 - ・生活体験・社会体験等の機会の喪失
- ②高学歴社会における進路の未決定傾向
 - ・職業について考えることや、職業の選択、決定を先送りにする傾向の高まり
 - ・自立的な進路選択や将来計画が希薄なまま、進学、就職する者の増加

学校教育に求められている姿

「生きる力」の育成
～確かな学力，豊かな人間性，健康・体力～

- 社会人として自立した人を育てる観点から
- ・学校の学習と社会とを関連付けた教育
 - ・生涯にわたって学び続ける意欲の向上
 - ・社会人としての基礎的資質・能力の育成
 - ・自然体験，社会体験等の充実
 - ・発達に応じた指導の継続性
 - ・家庭・地域と連携した教育

キャリア教育の推進

(2) キャリア教育の提唱と経緯

① キャリア教育の登場

我が国において「キャリア教育」という文言が公的に登場し、その必要性が提唱されたのは、平成11年12月、中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」においてであった。同審議会は「キャリア教育を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」とし、さらに「キャリア教育の実施に当たっては家庭・地域と連携し、体験的な学習を重視するとともに、各学校ごとに目的を設定し、教育課程に位置付けて計画的に行う必要がある」と提言している。

この答申を受け、キャリア教育に関する調査研究が進められ、平成14年11月には、国立教育政策研究所生徒指導研究センターが「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査研究報告書）」を報告した。同調査研究報告書は、子どもたちの進路・発達をめぐる環境の変化について、数々のデータを基に分析し、「職業観・勤労観の育成が不可欠な『時代』を迎えた」とし、さらに、学校段階における職業的（進路）発達課題について解説するとともに、「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」を示した。

一方、学校における教育活動が、ともすれば「生きること」や「働くこと」と疎遠になったり、十分な取組が行われてこなかったりしたのではないかとの指摘も踏まえ、同年、文部科学省内に「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」を設置し、平成16年1月には、その報告書「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために」を発表した。

この間、国は、文部科学大臣、厚生労働大臣、経済産業大臣、経済財政政策担当大臣の関係4閣僚による「若者自立・挑戦戦略会議」が、平成15年6月に「若者自立・挑戦プラン」を策定し、目指すべき社会として、「若者が自らの可能性を高め、挑戦し、活躍できる夢のある社会」と「生涯にわたり、自立的な能力向上・発揮ができ、やり直しがきく社会」をあげ、政府、地方自治体、教育界、産業界が一体となった取組が必要であるとした。キャリア教育の推進は、その重要な柱として位置付けられた。その後平成18年には、内閣官房長官、農林水産大臣、少子化・男女共同参画担当大臣も加え、「若者の自立・挑戦のためのアクションプラン（改訂）」が策定され、キャリア教育のさらなる充実を図ることとした。



主なキャリア教育推進施策の展開

平成11年(1999年)12月 中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」

- 文部科学行政関連の審議会報告等において、「キャリア教育」という用語が初めて登場
- 改善の方策
 - ・キャリア教育を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある。
 - ・家庭・地域と連携し、体験的な学習を重視する必要がある。
 - ・各学校ごとに目的を設定し、教育課程に位置付けて計画的に行う必要がある。

平成14年(2002年)11月 国立教育政策研究所「児童生徒の職業観・勤労感を育む教育の推進について(調査研究報告)」
文部科学省「キャリア教育に関する総合的調査研究者会議」設置

平成15年(2003年)6月 「若者自立・挑戦プラン」

平成16年(2004年)1月 文部科学省「キャリア教育に関する総合的調査研究者会議」報告書

平成16年(2004年)12月 「若者自立・挑戦のためのアクションプラン」

平成18年(2006年) 「若者の自立・挑戦のためのアクションプラン(改訂)」

平成19年(2007年) 「キャリア教育等推進プラン ―自分でつかもう自分の人生―」

平成23年(2011年)1月 中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」

報告書・手引書・パンフレット等

平成16年(2004年)1月 報告書「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために」

- 「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」

平成17年(2005年)11月 「中学校 職場体験ガイド」

平成18年(2006年)11月 「小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引」

平成18年(2006年)11月 「高等学校におけるキャリア教育の推進に関する調査研究協力者会議」報告書

平成19年(2007年)3月 「職場体験・インターンシップに関する調査研究報告書」

平成20年(2008年)3月 「キャリア教育体験活動事例集(第1分冊) ―家庭や地域との連携・協力―」

平成20年(2008年)3月 「自分に気付き、未来を築くキャリア教育 ―小学校におけるキャリア教育推進のために―」(パンフレット)

平成21年(2009年)3月 「キャリア教育体験活動事例集(第2分冊) ―家庭や地域との連携・協力―」

平成21年(2009年)11月 「自分と社会をつなぎ、未来を拓くキャリア教育 ―中学校におけるキャリア教育推進のために―」(パンフレット)

平成22年(2010年)1月 「小学校キャリア教育の手引き」

平成22年(2010年)2月 「自分を社会に生かし、自立を目指すキャリア教育 ―高等学校におけるキャリア教育推進のために―」(パンフレット)

平成23年(2011年)3月 「中学校キャリア教育の手引き」

平成23年(2011年)5月 「小学校キャリア教育の手引き(改訂版)」

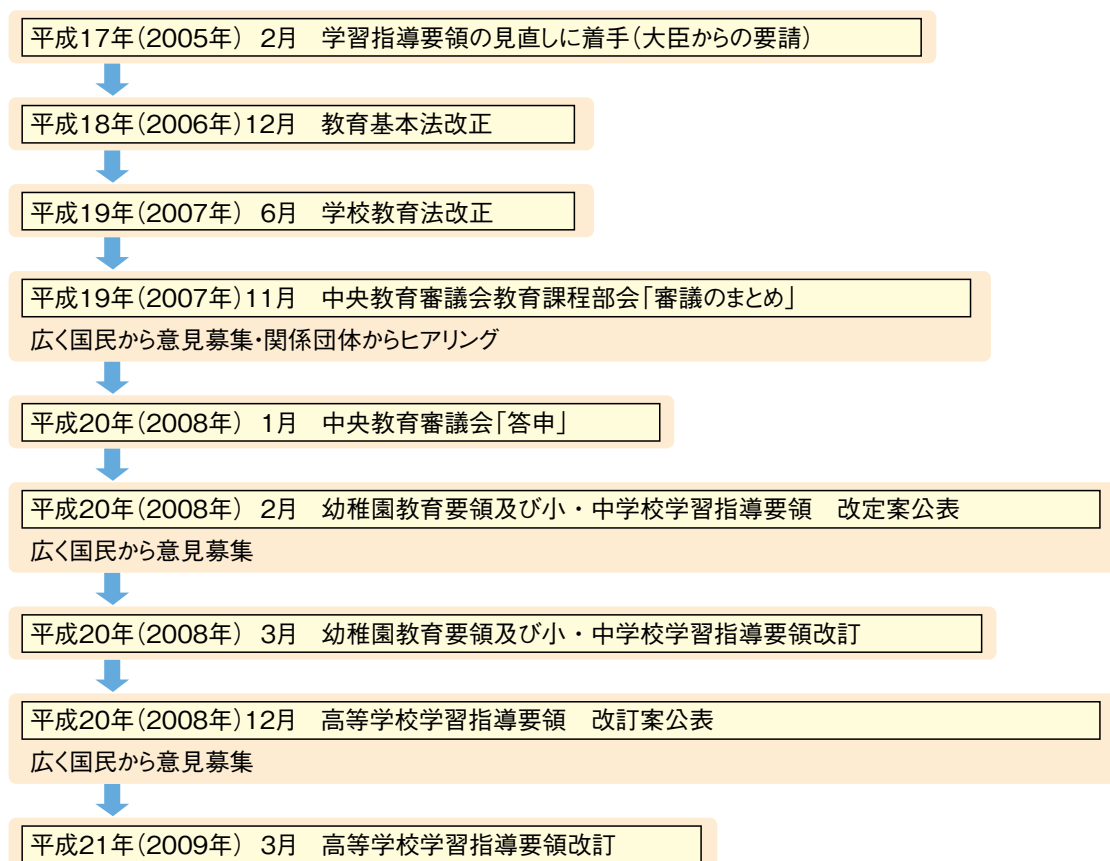
② 学習指導要領改訂までの経緯

こうした経緯を踏まえ、平成18年12月に改正された教育基本法では、第2条（教育の目標）第2号において「個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと」が規定された。また、同法第5条（義務教育）第2項では「義務教育として行われる普通教育は、各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的として行われるものとする」と定められた。

さらに、翌年、平成19年には、学校教育法第21条（義務教育の目標）において、第1号「学校内外における社会的活動を促進し、自主、自律及び協同の精神、規範意識、公正な判断力並びに公共の精神に基づき主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと」、第4号「家族と家庭の役割、生活に必要な衣、食、住、情報、産業その他の事項について基礎的な理解と技能を養うこと」、第10号「職業についての基礎的な知識と技能、勤労を重んずる態度及び個性に応じて将来の進路を選択する能力を養うこと」が定められ、これらが、今日、キャリア教育を推進する上での法的根拠となっている。

また、文部科学省は、平成17年から学習指導要領の改訂作業を進め、国民からの意見聴取を経て、平成20年3月、幼稚園教育要領と小・中学校学習指導要領を公示した。新学習指導要領の中では、随所にキャリア教育が目指す目標や内容を盛り込んでいる。（p.49～参照）

学習指導要領改訂までの主な経緯



2 キャリア教育の定義

一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育

(中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」(平成23年1月31日))

キャリア教育は、子ども・若者がキャリアを形成していくために必要な能力や態度の育成を目標とする教育的働きかけである。そして、キャリアの形成にとって重要なのは、自らの力で生き方を選択していくことができるよう必要な能力や態度を身に付けることにある。したがって、キャリア教育は、子ども・若者一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な能力や態度を育てることを目指すものである。自分が自分として生きるために、「学び続けたい」「働き続けたい」と強く願い、それを実現させていく姿がキャリア教育の目指す子ども・若者の姿なのである。

これらのことをふまえ、平成23年に中央教育審議会はキャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義した。中央教育審議会はこの定義を提示した理由を次のように述べている。これには留意する必要がある。

キャリア教育の必要性や意義の理解は、学校教育の中で高まってきており、実際の成果も徐々に上がっている。

しかしながら、「新しい教育活動を指すものではない」としてきたことにより、従来の教育活動のままでよいと誤解されたり、「体験活動が重要」という側面のみをとらえて、職場体験活動の実施をもってキャリア教育を行ったものとみなしたりする傾向が指摘されるなど、一人一人の教員の受け止め方や実践の内容・水準には、ばらつきのあることも課題としてうかがえる。

このような状況の背景には、キャリア教育のとらえ方が変化してきた経緯が十分に整理されてこなかったことも一因となっていると考えられる。このため、今後、上述のようなキャリア教育の本来の理念に立ち返った理解を共有していくことが重要である。

(中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」(平成23年1月31日))

上に指摘される「キャリア教育のとらえ方が変化してきた経緯」についての同答申の説明は、以下の通りである。

中央教育審議会「初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申)」(平成11年)では、キャリア教育を「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」とし、進路を選択することにより重点が置かれていると解釈された。また、キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書(平成16年)では、キャリア教育を「『キャリア』概念に基づき『児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育』」ととらえ、「端的には」という限定付きながら「勤労観・職業観を育てる教育」としたこともあり、勤労観・職業観の育成のみに焦点が絞られてしまい、現時点においては社会的・職業的自立のために必要な能力の育成がやや軽視されてしまっている

ことが課題として生じている。

無論、勤労観・職業観が十分に形成されていないことは様々に指摘されており、一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度の育成を目指す体系的なキャリア教育を通して、勤労観・職業観をはじめとする価値観を形成・確立できるよう働きかけていくことは極めて重要である。しかし、これまでのキャリア教育においては、勤労観・職業観の育成のみに焦点が絞られ、平成11年の中央教育審議会答申以降、継続的に求められてきた能力や態度の育成がやや軽視されてしまっていたことは見過ごされるべきではないだろう。今日、キャリア教育の本来の理念に立ち返った理解が強く求められている。

また、キャリア教育を理解するためには、上に示した定義における「キャリア」「キャリア発達」についての正しい理解もまた不可欠である。

(1) キャリアとは

人は、他者や社会とのかかわりの中で、職業人、家庭人、地域社会の一員等、様々な役割を担いながら生きている。これらの役割は、生涯という時間的な流れの中で変化しつつ積み重なり、つながっていくものである。また、このような役割の中には、所属する集団や組織から与えられたものや日常生活の中で特に意識せず習慣的に行っているものもあるが、人はこれらを含めた様々な役割の関係や価値を自ら判断し、取捨選択や創造を重ねながら取り組んでいる。

人は、このような自分の役割を果たして活動すること、つまり「働くこと」を通して、人や社会にかかわることになり、そのかかわり方の違いが「自分らしい生き方」となっていくものである。

このように、人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねが、「キャリア」の意味するところである。

(中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」(平成23年1月31日))

これまで「キャリア」(career)という言葉は、それぞれの時代や立場、用いられる場面等によって極めて多様に用いられてきた。そのこともあって、キャリアという言葉が登場した当初は、様々な異なる見解を生む一つの要因となり、キャリア教育についての正確な理解がなかなか進みにくかった。したがって、「キャリア」の意味を共通に確認しておくことは重要である。

「キャリア」の語源は、中世ラテン語の「車道」を起源とし、英語で、競馬場や競技場のコースやトラック(行路、足跡)を意味するものであった。そこから、人がたどる行路やその足跡、経歴、遍歴なども意味するようになった。しかし、20世紀後半の産業構造の新たな変革期を迎え、「キャリア」は、特定の職業や組織の中での働き方にとどまらず、広く「働くこととのかかわりを通しての個人の体験のつながりとしての生き様」を指すようになった。

本『手引き』では、「キャリア教育」の「キャリア」を「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね」ととらえることとする。

人は、誕生から老年期に至るまで、それぞれの環境の中で生きていく。その際、乳幼児であっても、青年であっても、その時々、その場面場面で、立場や役割が与えられている。例えば、小学生は、親から見た子どもであり、小学校に通う児童であり、友達と遊ぶ余暇人でもある。さらに成長すれば、労働者となり、家庭を築く家庭人となる。これらの役割は、生涯という時間的な流れの中で変化しつつ積み重なり、つながっていくものである。また、人はこれらを含めた様々

な役割の関係や価値を自ら判断し、取捨選択や創造を重ねながらその役割に取り組んでいる。人は、このような自分の役割を果たして活動することを通して、他者や社会にかかわることになり、そのかわり方の違いが「自分らしい生き方」となっていくものである。このように、「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね」の総体を「キャリア」ととらえるのである。

この「キャリア」の概念については、「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」（平成16年1月28日）が、「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」と解説していたが、ここで述べられている「キャリア」と、本『手引き』で用いる「キャリア」とは、本質的に同じ概念である。

また、「働くこと」については、職業生活以外にも家事や学校での係活動、あるいは、ボランティア活動などの多様な活動があることなどから、個人がその学校生活、職業生活、家庭生活、市民生活等の生活の中で経験する様々な立場や役割を遂行する活動として、幅広くとらえる必要がある。



(2) キャリア発達とは

社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程を「キャリア発達」という。

（中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（平成23年1月31日））

子どもの心と体は、発達の階段を一步一步上っていきながら成長していく。そうした発達過程にある子どもたち一人一人が、それぞれの段階に応じて、適切に自己と働くこととの関係付けを行い、自立的に自己の人生を方向付けていく過程、言い換えると「自己の知的、身体的、情緒的、社会的な特徴を一人一人の生き方として統合していく過程」が「キャリア発達」である。具体的には、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していくことがキャリア発達の過程ととらえていい。

D.E.スーパーは、このキャリア発達の過程を、生涯における役割の分化と統合の過程として示している。（p.24参照）

人の成長・発達の過程には、節目となる発達の段階があり、それぞれの発達の段階において克服あるいは達成すべき課題がある。それと同様に、キャリア発達にも、幾つかの段階が

あり、各段階で取り組まなければならない課題がある。

人は、自己実現、自己の確立に向けて、社会とかかわりながら生きようとする。そして、各時期にふさわしいそれぞれのキャリア発達の課題を達成していく。このことが、生涯を通じてのキャリア発達となるのである。キャリア教育は、そのような一人一人のキャリア発達を支援するものでなければならない。

また、キャリア発達は、知的、身体的、情緒的、社会的発達とともに促進される。例えば、小学生は小学生のものの見方や行動の仕方に基づいて、自己と社会の関係をとらえ、自分を方向付けようとする。その意味で、キャリアの発達の理解には、まず「一人一人の能力や態度、資質は段階をおって育成される」ということを理解しておく必要がある。

このことを踏まえ、国立教育政策研究所生徒指導研究センターでは、「職業観・勤労観をはぐくむ学習プログラムの枠組み（例）」を開発し、キャリア発達を促す視点に立って、将来自立した人として生きていくために必要な具体的な能力や態度を構造化し、例として示した。(p.10参照)

同学習プログラムでは、その枠組みの基本的な軸として、「人間関係形成能力」、「情報活用能力」、「将来設計能力」、「意思決定能力」の4つの能力領域をあげている。これらが開発された詳しい経緯については是非コラムを参照されたい。(p.12参照)

この枠組みは、一定の普遍性をもつように開発されたものであるが、あくまで一つの例であって、そこに示された4領域8能力を育成しなければキャリア発達を促すことはできないというものではない。実際に、これらの能力は、互いに関連しており、重なりや重み付けの程度も異なることから、明確に独立して存在するものではなく、必要な能力や態度は、各学校において、子どもたちの実態を把握した上で育てたい力として設定することが望ましい。児童の実態や学校・地域の課題等によっては、これらの能力以外にも必要な能力があるだろうし、くくり方を変えた表し方も出てくるだろう。それゆえ、「職業観・勤労観をはぐくむ学習プログラムの枠組み（例）」において、あえて「例」と明示されているのである。



職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例） — 職業的

			小 学 校		
			低 学 年	中 学 年	高 学 年
職業的（進路）発達段階			進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期		
○職業的（進路）発達課題（小～高等学校段階） 各発達段階において達成しておくべき課題を、進路・職業の選択能力及び将来の職業人として必要な資質の形成という側面から捉えたもの。			・自己及び他者への積極的関心の形成・発展 ・身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上 ・夢や希望、憧れる自己イメージの獲得 ・勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成		
職業的（進路）発達にかかわる諸能力			職業的（進路）発達を促すために		
領域	領域説明	能力説明			
人間関係形成能力	他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む。	【 自他の理解能力 】 自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切に行動していく能力	・自分の好きなことや嫌なことをはっきり言う。 ・友達と仲良く遊び、助け合う。 ・お世話になった人などに感謝し親切にする。	・自分のよいところを見つける。 ・友達のよいところを認め、励まし合う。 ・自分の生活を支えている人に感謝する。	・自分の長所や欠点に気が付き、自分らしさを発揮する。 ・話し合いなどに積極的に参加し、自分と異なる意見も理解しようとする。
		【 コミュニケーション能力 】 多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力	・あいさつや返事をする。 ・「ありがとう」や「ごめんなさい」を言う。 ・自分の考えをみんなの前で話す。	・自分の意見や気持ちをわかりやすく表現する。 ・友達の気持ちや考えを理解しようとする。 ・友達と協力して、学習や活動に取り組む。	・思いやりの気持ちを持ち、相手の立場に立って考え行動しようとする。 ・異年齢集団の活動に進んで参加し、役割と責任を果たそうとする。
情報活用能力	学ぶこと・働くことの意義や役割及びその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に生かす。	【 情報収集・探索能力 】 進路や職業等に関する様々な情報を収集・探索するとともに、必要な情報を選択・活用し、自己の進路や生き方を考えていく能力	・身近で働く人々の様子が分かり、興味・関心を持つ。	・いろいろな職業や生き方があることが分かる。 ・分からないことを、図鑑などで調べたり、質問したりする。	・身近な産業・職業の様子やその変化が分かる。 ・自分に必要な情報を探す。 ・気付いたこと、分かったことや個人・グループでまとめたことを発表する。
		【 職業理解能力 】 様々な体験等を通して、学校で学ぶことと社会・職業生活との関連や、今しなければならないことなどを理解していく能力	・係や当番の活動に取り組む、それらの大切さが分かる。	・係や当番活動に積極的に分かる。 ・働くことの楽しさが分かる。	・施設・職場見学等を通じ、働くことの大切さや苦勞が分かる。 ・学んだり体験したりしたこと、生活や職業との関連を考える。
将来設計能力	夢や希望を持って将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する。	【 役割把握・認識能力 】 生活・仕事上の多様な役割や意義及びその関連等を理解し、自己の果たすべき役割等についての認識を深めていく能力	・家の手伝いや割り当てられた仕事・役割の必要性が分かる。	・互いの役割や役割分担の必要性が分かる。 ・日常の生活や学習と将来の生き方との関係に気付く。	・社会生活にはいろいろな役割があることやその大切さが分かる。 ・仕事における役割の関連性や変化に気付く。
		【 計画実行能力 】 目標とすべき将来の生き方や進路を考え、それを実現するための進路計画を立て、実際の選択行動等で実行していく能力	・作業の準備や片づけをする。 ・決められた時間やきまりを守ろうとする。	・将来の夢や希望を持つ。 ・計画づくりの必要性に気付く、作業の手順が分かる。 ・学習等の計画を立てる。	・将来のことを考える大切さが分かる。 ・憧れとする職業を持ち、今、しなければならないことを考える。
意思決定能力	自らの意志と責任でよりよい選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服する。	【 選択能力 】 様々な選択肢について比較検討したり、葛藤を克服したりして、主体的に判断し、自らにふさわしい選択・決定を行っていく能力	・自分の好きなもの、大切なものを持つ。 ・学校でしてよいことと悪いことがあることが分かる。	・自分のやりたいこと、よいと思うことなどを考え、進んで取り組む。 ・してはいけないことが分かり、自制する。	・係活動などで自分のやりたい係、やれそうな係を選ぶ。 ・教師や保護者に自分の悩みや葛藤を話す。
		【 課題解決能力 】 意思決定に伴う責任を受け入れ、選択結果に適応するとともに、希望する進路の実現に向け、自ら課題を設定してその解決に取り組む能力	・自分のことは自分で行うとする。	・自分の仕事に対して責任を感じ、最後までやり通そうとする。 ・自分の力で課題を解決しようとする。	・生活や学習上の課題を見つけ、自分の力で解決しようとする。 ・将来の夢や希望を持ち、実現を目指して努力しようとする。

(進路) 発達にかかわる諸能力の育成の視点から

※太字は、「職業観・勤労観の育成」との関連が特に強いものを示す

中 学 校	高 等 学 校
現実的探索と暫定的選択の時期	現実的探索・試行と社会的移行準備の時期
- 肯定的自己理解と自己有用感の獲得 - 趣味・関心等に基づく職業観・勤労観の形成 - 進路計画の立案と暫定的選択 - 生き方や進路に関する現実的探索	- 自己理解の深化と自己受容 - 選択基準としての職業観・勤労観の確立 - 将来設計の立案と社会的移行の準備 - 進路の現実吟味と試行的参加
育成することが期待される具体的な能力・態度	
- 自分の良さや個性が分かり、他者の良さや感情を理解し、尊重する。 - 自分の言動が相手や他者に及ぼす影響が分かる。 - 自分の悩みを話せる人を持つ。	- 自己の職業的な能力・適性を理解し、それを受け入れて伸ばそうとする。 - 他者の価値観や個性のユニークさを理解し、それを受け入れる。 - 互いに支え合い分かり合える友人を得る。
- 他者に配慮しながら、積極的に人間関係を築こうとする。 - 人間関係の大切さを理解し、コミュニケーションスキルの基礎を習得する。 - リーダーとフォロアーの立場を理解し、チームを組んで互いに支え合いながら仕事をする。 - 新しい環境や人間関係に適応する。	- 自己の思いや意見を適切に伝え、他者の意思等を的確に理解する。 - 異年齢の人や異性等、多様な他者と、場に応じた適切なコミュニケーションを図る。 - リーダー・フォロアーシップを発揮して、相手の能力を引き出し、チームワークを高める。 - 新しい環境や人間関係を生かす。
- 産業・経済等の変化に伴う職業や仕事の変化のあらましを理解する。 - 上級学校・学科等の種類や特徴及び職業に求められる資格や学習歴の概略が分かる。 - 生き方や進路に関する情報を、様々なメディアを通して調査・整理し活用する。 - 必要に応じ、獲得した情報に創意工夫を加え、提示、発表、発信する。	- 卒業後の進路や職業・産業の動向について、多面的・多角的に情報を集め検討する。 - 就職後の学習の機会や上級学校卒業時の就職等に関する情報を検索する。 - 職業生活における権利・義務や責任及び職業に就く手続き・方法などが分かる。 - 調べたことなどを自分の考えを交え、各種メディアを通して発表・発信する。
- 将来の職業生活との関連の中で、今の学習の必要性や大切さを理解する。 - 体験等を通して、勤労の意義や働く人々の様々な思いが分かる。 - 係・委員会活動や職場体験等で得たことを、以後の学習や選択に生かす。	- 就業等の社会参加や上級学校での学習等に関する探索的・試行的な体験に取り組む。 - 社会規範やマナー等の必要性や意義を体験を通して理解し、習得する。 - 多様な職業観・勤労観を理解し、職業・勤労に対する理解・認識を深める。
- 自分の役割やその進め方、よりよい集団活動のための役割分担やその方法等が分かる。 - 日常生活や学習と将来の生き方との関係を理解する。 - 様々な職業の社会的役割や意義を理解し、自己の生き方を考える。	- 学校・社会において自分の果たすべき役割を自覚し、積極的に役割を果たす。 - ライフステージに応じた個人的・社会的役割や責任を理解する。 - 将来設計に基づいて、今取り組むべき学習や活動を理解する。
- 将来の夢や職業を思い描き、自分にふさわしい職業や仕事への関心・意欲を高める。 - 進路計画を立てる意義や方法を理解し、自分の目指すべき将来を暫定的に計画する。 - 将来の進路計画に基づいて当面の目標を立て、その達成に向けて努力する。	- 生きがい・やりがいがあり自己を生かせる生き方や進路を現実的に考える。 - 職業についての総合的・現実的な理解に基づいて将来を設計し、進路計画を立案する。 - 将来設計、進路計画の見直し再検討を行い、その実現に取り組む。
- 自己の個性や興味・関心等に基づいて、よりよい選択をしようとする。 - 選択の意味や判断・決定の過程、結果には責任が伴うことなどを理解する。 - 教師や保護者と相談しながら、当面の進路を選択し、その結果を受け入れる。	- 選択の基準となる自分なりの価値観、職業観・勤労観を持つ。 - 多様な選択肢の中から、自己の意志と責任で当面の進路や学習を主体的に選択する。 - 進路希望を実現するための諸条件や課題を理解し、実現可能性について検討する。
- 学習や進路選択の過程を振り返り、次の選択場面に生かす。 - よりよい生活や学習、進路や生き方等を目指して自ら課題を見出していくことの大切さを理解する。 - 課題に積極的に取り組み、主体的に解決していこうとする。	- 将来設計、進路希望の実現を目指して、課題を設定し、その解決に取り組む。 - 自分を生かし役割を果たしていく上での様々な課題とその解決策について検討する。 - 理想と現実との葛藤経験等を通し、様々な困難を克服するスキルを身につける。

(国立教育政策研究所「児童生徒の職業感・勤労感を育む教育の推進について」(平成14年11月))